

キーワードから見る中共 19 回党大会報告の特徴

村田忠禧（横浜国立大学名誉教授）

10月18日の中共第19回党大会における習近平総書記の報告は3万2千字を越す長大論文である。しかも内容は多岐にわたり、かつ豊富なため、短文で解説することは難しい。注目すべきキーワードなどを紹介することで責任を果たしたい。

新しい時代の主要矛盾

1982年9月に採択された党規約では中国社会の「主要矛盾」を「人民の日々増大する物質・文化への要求と立ち遅れた社会・生産との間の矛盾」と捉え、経済建設を第一とする「四つの現代化」実現を目標にして中国は邁進してきた。奮闘の結果、1980年には305に過ぎなかった中国のGDPは2016年には11,232（いずれも単位は100万米ドル）と37倍に増え、世界第二の経済大国になった。一人当たりGDPにおいても80年は309ドルであったのが16年には8,123ドルと26倍になった。小康社会（まずまずの暮らしができる社会）の全面的達成が目前に迫っている。中国は大きく変化したのである。

19回党大会は中国社会の「主要矛盾」を「人民の日ごとに高まるより良い生活への要求と不均衡、不十分な発展との間の矛盾」へと転化したと捉えている。より良い生活への人々の要求は日々拡大し、高まる。物質・文化などへの要求だけでなく、民主、法治、公平、正義、安全、環境といった面にまで及ぶようになる。

貧しさから脱却するために中国は共産党の指導のもとで社会主義の道を歩んできたが、その課題はほぼ達成できた。次の段階は真に豊かな社会を実現するために中国共産党は人民および時代をリードしていくことができるだろうかにある。

新時代の三段階発展戦略

「小康社会の全面的建設に完全勝利し、新時代の中国の特色ある社会主義の偉大な勝利をかち取ろう」と題する「報告」はこれからの半世紀余りにおよぶ中国の任務を三段階に分けて描いている。建党百周年を迎える2020年までの第一段階は、小康社会建設の全面的達成を実現すること。その次の20年から50年までの時期を二つに分け、35年までの第二段階で社会主義現代化を基本的に実現すること。報告では触れていないが、30年代前半に中国のGDPは米国を抜いて世界一となるであろう。しかしその時点でも一人当たりGDPではまだ米国の四分の一程度。中国の大きさ、複雑さをあらためて考えざるを得ない。この第二段階で中間所得層が大幅に増え、都市と農村との格差は縮小し、公共サービスの

均等化が実現し、共に豊かになる社会が実現するとのこと。その成果を踏まえ、第三段階の35年から建国百年を迎える50年前後には「富強、民主、文明、和諧（調和のとれた）、美麗（美しい）社会主義の現代化強国」としての中国が実現するとのこと。日本では「2035年までに国防と軍隊の現代化を基本的に実現し、今世紀中葉までに人民の軍隊を世界一流の軍隊に全面的に建設する」といった記述から、中国の軍事力増強に懸念を表明する論調がかなり見受けられる。しかし「報告」で軍隊・国防を論じている分量は全体の4.3%に過ぎない。「強国」という表現は「軍隊・国防」にだけでなく、「人才」「科学技術」「質」「宇宙」「ネットワーク」「交通」「貿易」「文化」「体育」「教育」など様々な分野で用いられている。「站起来（立ち上がる）」、「富起来（豊かになる）」の次の段階として「強起来（強くなる）」という表現を用いているのである。

責任ある「大国外交」

「人類運命共同体」「綠色發展」という表現は18大「報告」で初めて登場した。新時代の潮流を感じさせるこれらの意識が中国の人々に理解され、定着し、政策として具体化されていくのだろうか、と18大報告を読んで思ったことがある。19大「報告」になると「人類運命共同体」が6回、「綠色發展」が4回と大幅に増えている。「中国共産党は中国人民の幸福を追求するための政党であるとともに、人類の進歩事業のために奮闘する政党でもある」と世界との結びつきを明らかにしている。「一帯一路」構想は13年秋に初めて提唱された構想だが「報告」では5回も登場し、修正された党規約にも書き込まれた。「大国外交」という用語も19大で初めて登場している。

「相互に尊重し、平等に協議し、冷戦思考と強権政治をきっぱりと捨て去り、対抗ではなく対話で、同盟を結ぶのではなくパートナー関係として国と国との付き合いをする新しい道を歩もう。対話によって紛争を解決し、協議によって分岐を解消することを堅持し、伝統的、非伝統的な安全への脅威に統一的に対処し、あらゆる形式のテロリズムに反対しよう」。

昨今の国際政治の舞台における中国の対応を考えるうえでも示唆に富んでいる。中国の国際的地位は際立って向上しており「責任ある大国の役割」を引き続き発揮すると表明しているこれらの表現から、自覚と自信のほどが窺える。

初心を忘れず反腐敗を堅持する

習近平が総書記になってもっとも注目を浴びたのは「トラもハエも叩く」という徹底した腐敗取締であり、人民大衆から大いに歓迎された。しかし腐敗を予防し、腐敗に反対する立場は以前から強調されてきた。18大「報告」でも「腐敗」は12回登場し、19大の13回と大差ない。だが19大の反腐敗闘争へ取り組む姿勢は18大よりはるかに厳しい。

19 大で初めて登場した用語に「關鍵少数（鍵となる少数）」がある。中央、省、県など各レベルでの指導幹部を指す。党組織は「民主集中制」で運営するのが建前だが、実際には「一把手」（トップ）の権限がきわめて強い。トップが有能かつ清廉であれば、ものごとは適切かつ迅速に処理されていく。しかし「一把手」が監督を受けないままだと、奢りと腐敗が発生し、人民大衆との間に深い溝が生じ、大衆の不満が鬱積すればいずれ爆発し、政権を揺るがす要因になる。

「党の自己浄化能力を増強させるには、党の自己監督と大衆の監督を強化することにかかっている。権力の行使への制約と監督を強化し、人民に権力を監督させ、権力は陽光の下で行使させ、権力を制度のオりに閉じ込める必要がある。上から下への組織監督を強化し、下から上への民主監督を改善し、同級による相互監督の役割を発揮させ、党員の指導幹部にたいする日常的な管理監督を強化すべきである」と多元的で厳格な監督の必要性を主張している。

19 大「報告」は「わが党が直面している執政環境は複雑で、党の先進性に影響を与え、党の純潔性を弱める要素も複雑であり、党内に存在する思想不純、組織不純、作風不純などの突出した問題はまだ根本的解決にいたっていないことを全党は冷静に認識しなければならない」。「腐敗はわが党が直面する最大の脅威である。反腐敗の道に終わりはなく、根気強さと粘り強さをもって進み、末梢と根本を兼治し、幹部は公正、政府は清廉、政治は明朗であることを保証してこそ、歴史の周期律〔歴代王朝の興亡の繰り返し〕から抜け出て、党と国家の秩序を長期にわたって安定させることができる」。

社会がある程度豊かになれば民衆の「民主化」要求が高まり「一党支配体制」は崩壊する、とする「開発独裁」論で今日の中国を読み解くことはできない。

「初心を忘れず、使命を胸に刻み、中国の特色ある社会主義の偉大な旗印を高く掲げ、小康社会の全面的達成に勝利し、新時代の中国の特色ある社会主義の偉大な勝利を勝ち取り、中華民族の偉大な復興という中国の夢を実現するためにたゆまず奮闘しよう」という党大会の主題の意味するところをよく考えてみたい。

『日本と中国』2017年12月1日号